

大原 A 遺跡 2

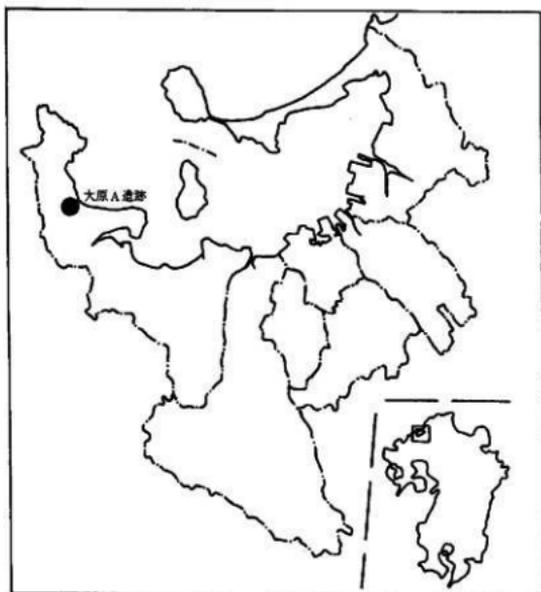
大原 A 遺跡第 1 次発掘調査報告 (その 2)
(団体営圃場整備事業に伴う調査)

1995

福岡市教育委員会

大原 A 遺跡 2

大原 A 遺跡第 1 次発掘調査報告 (その 2)
(団体営圃場整備事業に伴う調査)



遺跡略号 OHA
調査番号 9220

1995

福岡市教育委員会

巻頭図版



2006 検出状況 (北から)

序

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

今回調査が行われました、大原A遺跡は糸島半島の東岸に位置しており、弥生時代から中世にかけての遺跡です。今回の調査では弥生時代に属する多量の遺物が出土しており、周辺の調査事例との比較が必要となっております。また古代の製鉄関連遺構は律令体制の社会構造を考える上で、非常に貴重な遺構であります。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教 育 長 尾 花 剛

例 言

- 1 本書は福岡県福岡市西区大字今津字柳の浦外における埋立場搬入道路建設及び圍場整備事業に伴い、福岡市教育委員会が平成4年6月25日～10月31日に実施した大原（おおばる）A遺跡第一次調査の発掘調査報告書である。本書では圍場整備実施区域について行った調査の報告を行い、埋立場搬入道路予定地内における調査については本年発行の『大原A遺跡 1』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第430集 1995）において報告している。
- 2 遺構の実測は長家伸、黒田和生が行った。
- 3 遺物の実測は長家、英豪之、平川敬二が行った。
- 4 写真は長家が撮影した。
- 5 製図は長家、戸畑智恵子が行った。
- 6 遺物番号は全体で通し番号とし、本報告では201～275、『大原A遺跡 1』では1～112としている。
- 7 遺構は全体で通し番号を付け、遺構番号の頭に遺構の略号をつけて報告している。遺構の略号は掘立柱建物（SB）、竪穴住居跡（SC）、土坑（SK）、溝（SD）、甕棺（K）、ピット（SP）、製鉄関連遺構（SX）である。
- 8 本書で用いる方位は磁北である。
- 9 本調査出土の製鉄関連遺物についての分析を大澤正己氏に依頼し、分析結果報告については『大原A 1』に収録している。
- 10 本書に関わる図面・写真・遺物等の資料のすべては福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。
- 11 本書の執筆・編集は長家が行った。

遺跡調査番号	9220	遺 跡 略 号	OHA-1
調 査 地 地 番	西区大字今津字柳の浦外	分布地区番号	128-A-1
工 事 面 積	4.51ha	調査対象面積	5410㎡
調査実施面積	3600㎡	調査期間	平成4年6月25日～平成4年10月31日

本文目次

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査体制	1
第2章	調査の記録	5
1	調査概要	5
2	弥生時代の遺構と遺物	5
1)	竪穴住居跡	5
2)	土坑	7
3)	甕棺	8
3	古墳時代以降の遺構と遺物	8
1)	製鉄関連遺構	8
2)	掘立柱建物	13
3)	竪穴住居跡	14
4)	土坑	14
5)	溝	22
6)	ピット	22
4	包含層の調査	22
5	小結	26

挿図目次

第1図	周辺の遺跡と調査地点位置図 (1/50,000)	2
第2図	調査地点位置図 (1/5,000)	3
第3図	調査地点分割図 (1/2,000)	4
第4図	調査グリッド設定図 (1/2,000)	5
第5図	SC3003、SC3004及び出土遺物実測図 (1/60、1/80、1/3)	6
第6図	SK3005、SK3011及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	7
第7図	K3008、K3010及び出土遺物実測図 (1/20、1/6)	8
第8図	SX2006実測図 (1/30)	10
第9図	Ⅱ区第1包含層第3トレンチ土層図 (1/80)	10
第10図	SX2006周辺遺構配置図 (1/100)	11
第11図	SX2006関連遺物実測図 (1/4)	12
第12図	SB2015、SB2016、SB2017及び出土遺物実測図 (1/80、1/3)	13
第13図	SC2030及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	14
第14図	SK2002、SK2003、SK2004、SK2007、SK2011、SK2012、SK2014実測図 (1/40)	15
第15図	SK2013、SK2022、SK2025、SK2026、SK2029、SK2038、SK2153実測図 (1/60、1/40)	17
第16図	SK2033、SK2159、SK3009実測図 (1/40)	18
第17図	古墳時代以降土坑出土遺物実測図 (1/3)	19
第18図	SD3007及び出土遺物実測図 (1/120、1/3)	20
第19図	SP2197及び出土遺物実測図 (1/10、1/3)	20
第20図	Ⅱ区第1包含層除去後地形図及び包含層土層図 (1/400、1/80)	21
第21図	Ⅱ区第1包含層出土遺物実測図 (1) (1/3)	23
第22図	Ⅱ区第1包含層出土遺物実測図 (2) (1/3)	24
第23図	Ⅱ区第1包含層出土遺物実測図 (3) (1/3)	25

第24図	Ⅱ区第1包含層出土遺物実測図(4) (1/3、1/4)	26
第25図	弥生時代主要遺構配置図 (1/2,000)	27
第26図	古墳時代以降主要遺構配置図 (1/2,000)	27
付図	大原A遺跡第1次調査全体図 (1/400)	

図 版 目 次

1	調査区遠景 (東から)	15	SC2030 (西から)
2	Ⅱ区東半全景	16	SK2002 (南から)
3	Ⅲ区全景	17	SK2003 (東から)
4	SC3003 (東から)	18	SK2004 (北から)
5	SC3004 (西から)	19	SK2007 (西から)
6	SK3005 (北から)	20	SK2007土層
7	SK3011 (南から)	21	SK2022 (西から)
8	K3010 (北から)	22	SX2006北側遺構群 (南から)
9	K3008 (南から)	23	SK2026土層
10	SX2006検出状況 (北から)	24	SK2011、2012 (東から)
11	SX2006掘削状況 (南から)	25	Ⅱ区第1包含層第1トレンチ土層
12	SX2006完掘状況 (南から)	26	Ⅱ区第1包含層第2トレンチ土層
13	SX2006周辺 (西から)	27	出土遺物 (1)
14	Ⅱ区第1包含層第3トレンチ	28	出土遺物 (2)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市の西北端部に位置する大原海岸沿いは、福岡市でも数少ない自然環境の残された地域であり、文化財も数多く知られている。

この地域に、福岡市環境局により新西部埋立場整備工事及び搬入道路整備工事が計画され、平成4年4月21日付け、環境第115号で埋蔵文化財課に対して事前審査願いが提出された。搬入道路建設予定地には、本報告で取り上げる大原A遺跡のほか大原C遺跡、桑原飛橋貝塚等の周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれていた。

これに伴い大原A遺跡の位置する柳の浦地区においては、搬入道路建設に連動して約3.6haを対象にして団体営圃場整備事業を行うことが要請されていた。これに関して西区役所今宿出張所土木農林課長より平成4年5月27日付け、西今土第173号において埋蔵文化財課長宛に事前審査願いが提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、搬入道路整備地域と圃場整備予定地域の併せて4.51haについて試掘調査を行った。その結果対象地の丘陵部を中心に5410㎡で弥生時代～古代の生活遺構及び生産遺構が検出された。この結果を受けて西区役所今宿出張所、環境局施設課、埋蔵文化財課の三者で協議を行い、地元の了解を得て調査区の設定を行った。すなわち搬入道路建設部分にかかるものについては全面を調査対象とし、圃場整備地内においては切り土により破壊される部分については調査を行うが、切り土部分においても遺跡が破壊されない部分及び盛土にかかる部分については遺跡の保存を図ることとして今回は発掘調査の対象地域外とした。また設計変更・将来の開発に関して、未調査部分についてはその都度協議することとした。これにより搬入道路建設部分1390㎡、圃場整備部分2210㎡の併せて3600㎡について発掘調査を行い、1810㎡については保存対象として調査を行っていない(第3図)。

発掘調査は平成4年6月25日に開始し、平成4年10月31日に終了した。

現場作業を行うに当たっては、地元の方々には埋蔵文化財発掘調査に対してご理解をいただき多大なご協力を賜りました。また農林水産局、今宿出張所、環境局の方々にも様々な形でご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 西区役所今宿出張所土木農林課

地元圃場整備組合

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学

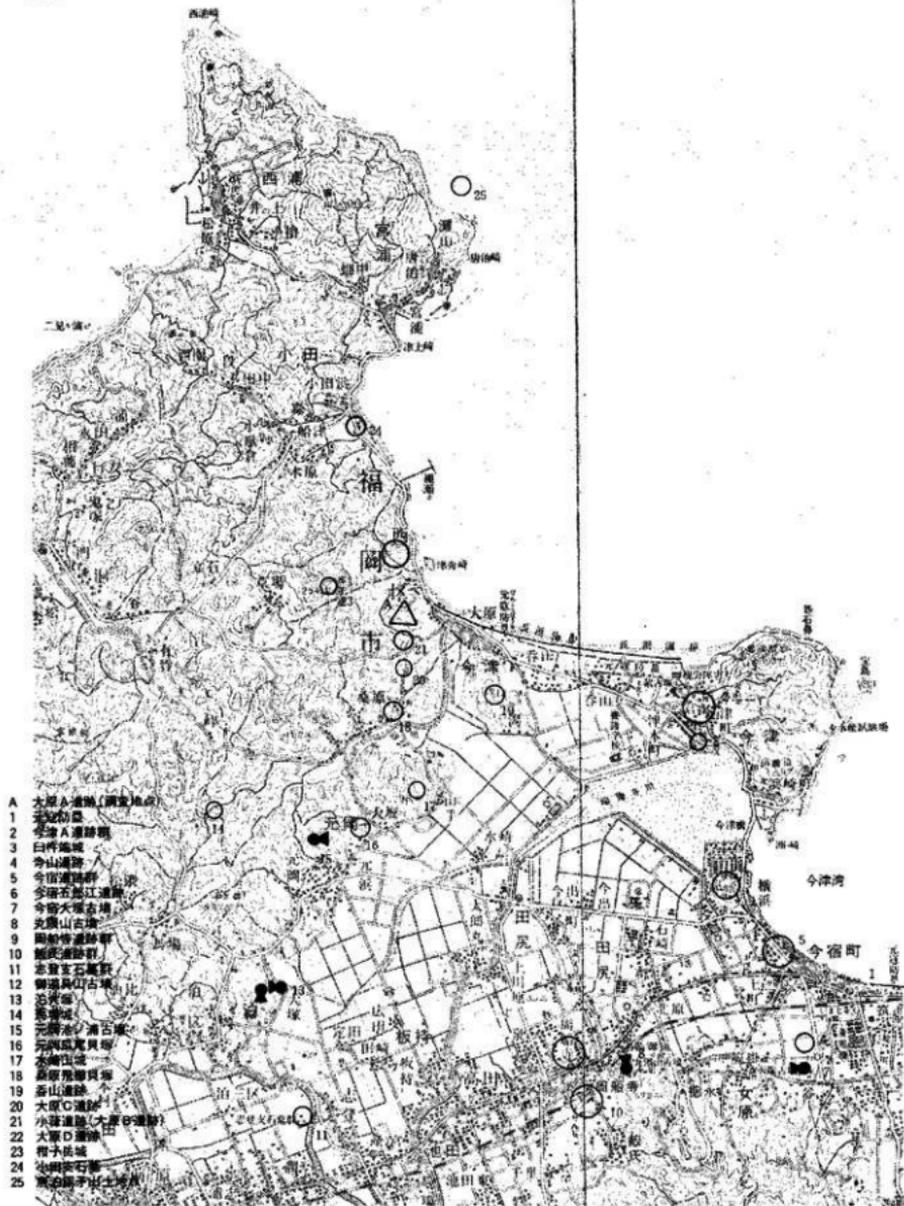
第1係長 飛高憲雄(前任) 横山邦継(現任)

調査庶務 第1係 中山昭則 吉田麻由美(前任) 内野保基 西田結香(現任)

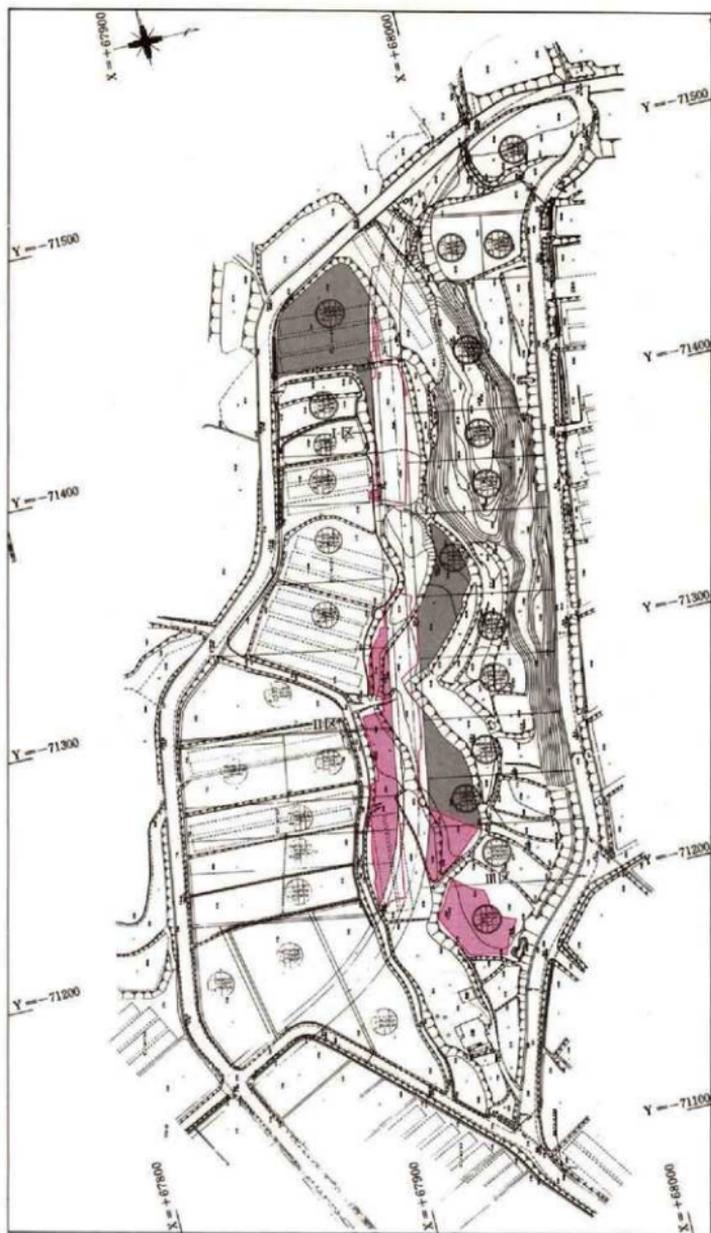
調査担当 第1係 長家伸

調査作業 黒田和生 有田吉太 石川虎久 鬼塚正之 中村昭市 高空哲也 池弘子 小金丸ミネ子
柴田シズノ 末松学枝 末松タツエ 末松信子 末松美佐子 徳重コマキ 徳重忠子
西田マキエ 波多江喜代子 関セツ子 平野直枝 古井モモエ 真鍋キミエ 森友ナカ

整理作業 太田次子 戸畑智恵子 森本由美子



第1図 周辺の遺跡と調査地点位置図 (1/50,000)



第3図 調査地点分佈図 (1/2,000)

※赤枠は調査地点全域
 赤アは本書報告分 (園場整備工事部分)
 黒アは遺跡保存のため未調査部分

第2章 調査の記録

1. 調査概要

本書で報告するのは、圃場整備事業に係る地区の調査（2210m²）である。調査区で言えばⅡ区の南端部とⅢ区がその対象である。本調査全体の概要及び立地と環境についてはすでに『大原A遺跡 1』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第430集 1995）で述べているので参照されたい。

本報告で取り上げるのは丘陵の裾部及び尾根先端部である。検出された遺構・遺物は弥生時代～中世に属するものである。弥生時代に属するものとしてはおもにⅢ区で検出した竪穴住居、土坑、甕棺等がある。削平を受け遺存状態は非常に悪いが、出土遺物の量を考えると、本丘陵上には弥生時代に規模の大きな集落が形成されていたようである。また丘陵南裾部には古代を主体とした遺構が広がっている。これらの遺構の中では、製錬炉、焼土坑が注目される。焼土坑については製炭用と考えられるものや、具体的な根拠には乏しいものの鍛冶炉等も存在していた可能性があり、これらの製鉄関連遺構が主体を占めている。さらに中世に属するものとしてはビット、包含層上面から出土の陶磁器があげられる。いずれも小破片であるが土師器などと共に越州窯系、龍泉窯系、同安窯系の青磁が出土している。またE、F、G・8、9区には谷部に包含層（Ⅱ区第1包含層）が形成されており、弥生時代～中世にかけての遺物が多量に出土している。

2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構としては竪穴住居跡、土坑、甕棺、ビット等がある。前述の様にほとんどがⅢ区の検出であり、遺構の残存状況も不良である。

1) 竪穴住居跡

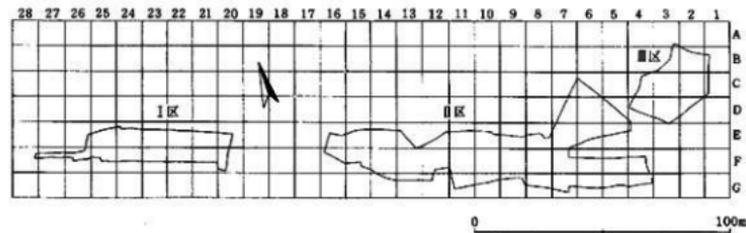
SC3003 (第5図)

C、D・2区で検出する。2棟の切り合いと考えられるが、埋土の差が不明瞭で、一度に掘り下げている。南側はK3010に切られている。壁の残りは悪く、住居内にも支柱穴等の施設は認められなかった。土器は床面より若干浮いて、破片のみの出土である。弥生時代中期に属するものであろう。

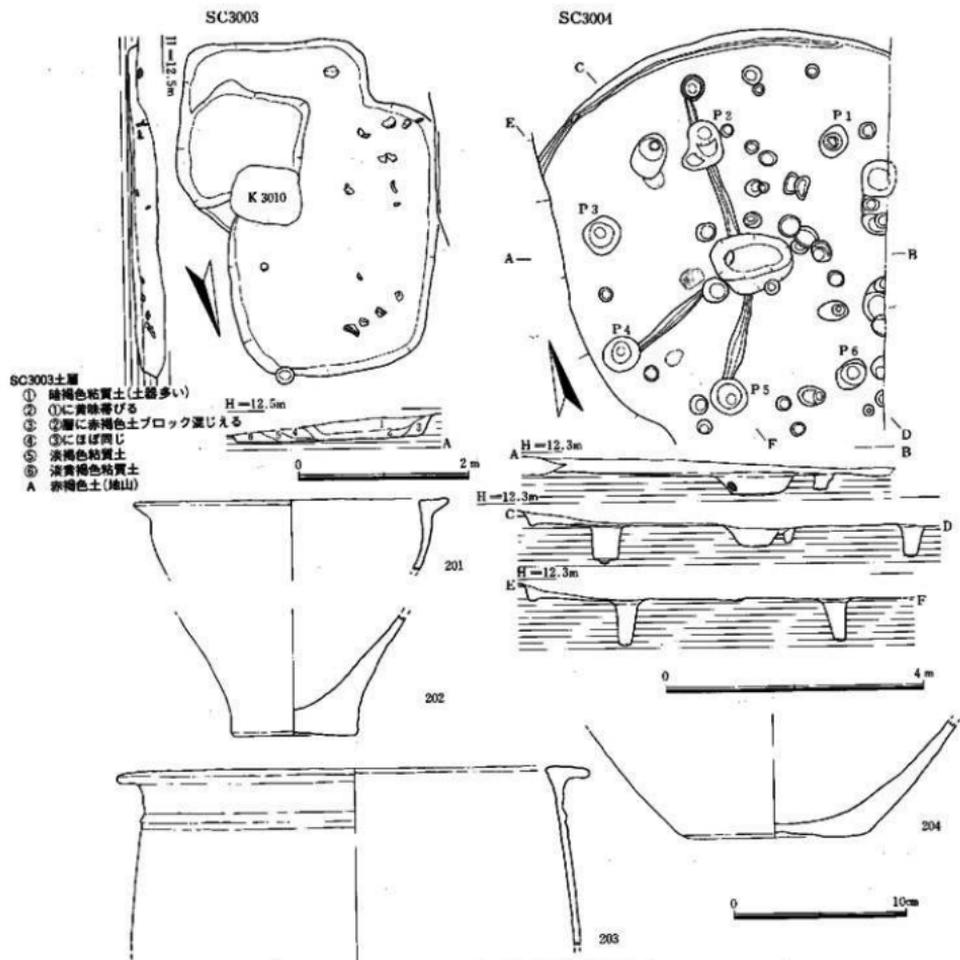
出土遺物 (第5図 201～203)

201は鉢口縁部である。逆L字状の口縁部の上面は僅かにくぼんでいる。203は甕である。口縁部は逆L字状を呈し、外側にやや傾斜する。口縁部下に鈍い断面三角形の突帯が貼付けられる。202は甕の底部である。底部はやや上げ底気味である。胎土に径2mm程度の石英砂粒を多量に含んでいる。

SC3004 (第5図)



第4図 調査グリッド設定図 (1/2,000)



第5図 SC3003、SC3004及び出土遺物実測図 (1/60、1/80、1/3)

B、C・1、2区で検出する。復元径約8mを測る円形の竪穴住居跡である。中央に長径1.3m、短径0.9mの長円形の土坑を検出しており、炉跡と考えられる。埋土は底面を中心に1cm～3cmの炭化物混じりの暗褐色土が覆い、その上には暗黄褐色土が堆積する。P1～P6が支柱穴と考えられ、東側で未検出の柱を加えて7本の支柱穴と考えられる。柱穴の埋土は上層が炭混じりの黄褐色土、下層が汚れた黄褐色土である。またP2、4、5から炉跡に向かって、幅20cm、深さ3～5cmの浅い溝が延びている。隙内の施設に伴うものと考えられるが、機能は不明である。また床面に3カ所被熱に

よる赤変部分が残っている。出土遺物は僅少であるが中期に属するものである。

出土遺物 (第5図 204)

壺の底部である。底面は薄く仕上げられ、若干上げ底となる。外面に2次的な焼成を受け、色調が淡いピンク色を呈している。

2) 土坑

SK3005 (第6図)

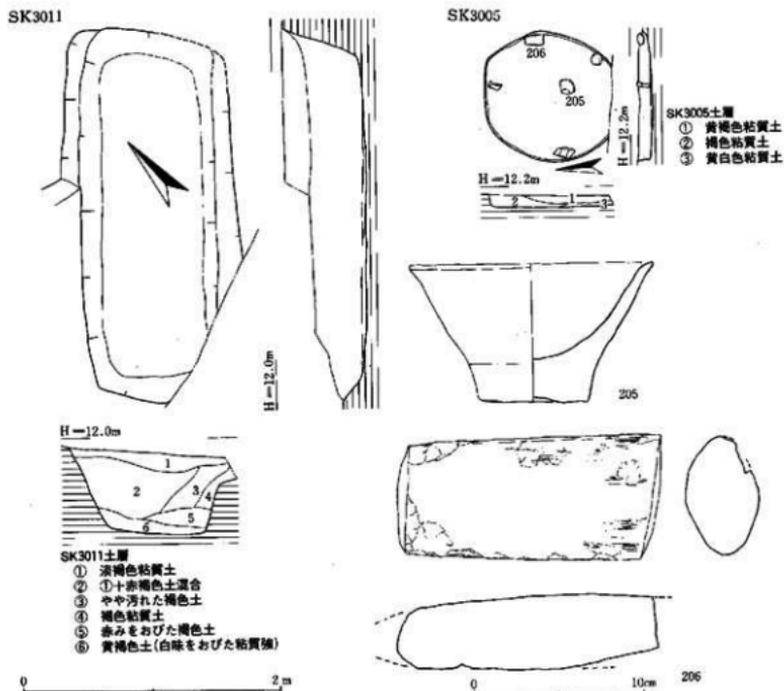
D・3区で検出する。径約1mを測り略円形を呈する土坑である。大きく削平されており、残存高は10cm程となっている。弥生土器壺・壺・鉢、石斧未製品が出土している。

出土遺物 (第6図 205、206)

205は鉢である。口径14.2cm、器高8cmを測る。底部は中心部分が径3cmの範囲で浅く窪んでいる。胎土には径3mm程度の石英砂粒が多量に含まれる。206は玄武岩製の蛤刃石斧未製品である。両端が欠損している。長軸方向に荒い研磨を行っている。

SK3011 (第6図)

D・2区で検出する。長軸2.9m、短軸1.35m、深さ0.65mを測る隅丸長方形を呈する。埋土はやや赤味を帯びた褐色土である。遺物は細片のみで時期は明確には不明だが、埋土から弥生時代に属す



第6図 SK3005、SK3011及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)

ると考えられる。土坑墓であろうか。

3) 甕棺

K3008 (第7図)

C・2区で検出する。甕棺はほぼ水平に埋置される。掘り方は径60cmの略円形を呈する。

出土遺物 (第7図 207、208)

207は上甕の蓋である。単口縁で口径27.4cmを測る。208は下甕の小形甕である。口縁部は逆L字状を呈し、端部の張り出しは短めである。底部は径8.6cmの平底である。

K3010 (第7図)

C・2区で検出する。SC3003を切っている。埋置角度は22°の単棺である。掘り方は85cm×65cmの長方形を呈する。底面は東側に一段平坦面を有す二段掘りである。

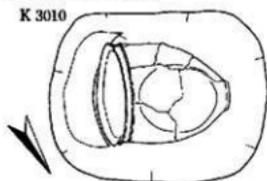
出土遺物 (第7図 209)

口縁部が「く」字状に屈曲する甕である。頸部直下に低い断面三角形の突帯を有する。口径35.8cm、底径9cm、器高47.5cmを測る。胴部中位に最大径を持ち、底部は平底である。

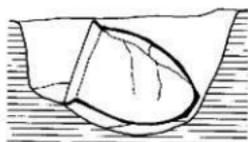
3. 古墳時代以降の遺構と遺物

1) 製鉄関連遺構 K3010

SX2006 (第8図)



H=12.2m



K3008



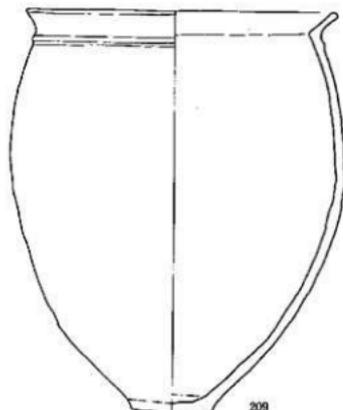
H=12.1m



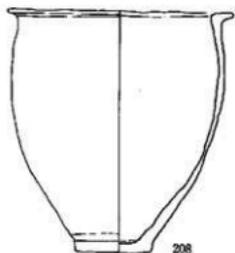
0 50cm



207



209



208

0 20cm

第7図 K3008、K3010及び出土遺物実測図 (1/20、1/6)

G・7区で検出する。丘陵南側緩斜面の末端で谷部の縁辺に位置する。ほぼ東西に主軸を取り、等高線に直交して構築されている。平面形は炉体と考えられる長方形の掘り方の両端に、排滓機能を持つ円形の土坑が取り付けいた鉄アレイ状の形態を有する。長軸全長3.65mを測る。

長方形の炉体部掘り方は長さ1.3m、幅0.6mである。北壁側に一部原位置をとどめた炉壁が貼付しているが、そのほか炉壁・炉底等は残存していない。また北壁の縁には高温による地山の被熱赤変部分が半円状に認められる。この被熱部分は厚さ5cm、検出面から10cmの深度に及んでいる。炉体部の掘り方は深さ20cmを測り、底面は熱を受けて赤変した部分は観察されていない。しかしI区検出のSX1027で見られるような下部構造は、土層の観察からは明瞭には認められず、炉体解体時に同時に下部構造部分まで破壊されたのであろうか。

両端の排滓坑は径約1m程度の略円形を呈する。いずれも炉体側が深くほみ、外縁側は一段の高まりを有している。このような形態は炉体両小口部からの排滓時のかきだしという行為によるものであろう。排滓坑には鉄滓・炉壁・炭化物が多く含まれている。SX2006の出土炉壁・鉄滓は91kgである。

またSX2006は谷部の縁辺に位置しており、製錬作業により排出された鉄滓等は主にこの谷に投棄されたようである。谷部に第3トレンチを設定したところ、包含層のI層（8世紀前半）の最下層に20cm～40cmの厚さで滓・炉壁が堆積していることを確認した（第9図）。またトレンチから羽口は出土していない。第3トレンチ出土の鉄滓・炉壁は全体で471kgである。

SX2006の炉体構造は掘り方から考えられると、長方形箱型炉と考えられるが、半円状に生じている地山の被熱部分を見ると上部炉体は円筒形に近い形で立ち上がっていた可能性も考えられる。実際に谷部に設定した第3トレンチからは緩く丸みを帯びた炉壁も出土している。同時に直線的に伸び、コーナーを有する炉壁も出土しており、数回の操業の中で多様な炉形が選択されていたのであろうか。また同トレンチ出土の炉底滓を観察すると、緩く湾曲する底面全体に細かな砂粒が付着しており、下部構造としてSX1027同様に砂質土の充填により炉底が造られたと考えられる。

SX2006内の埋土を洗浄したところ全体で8.8kgの砂鉄が検出されている。製錬の原材料であろう。

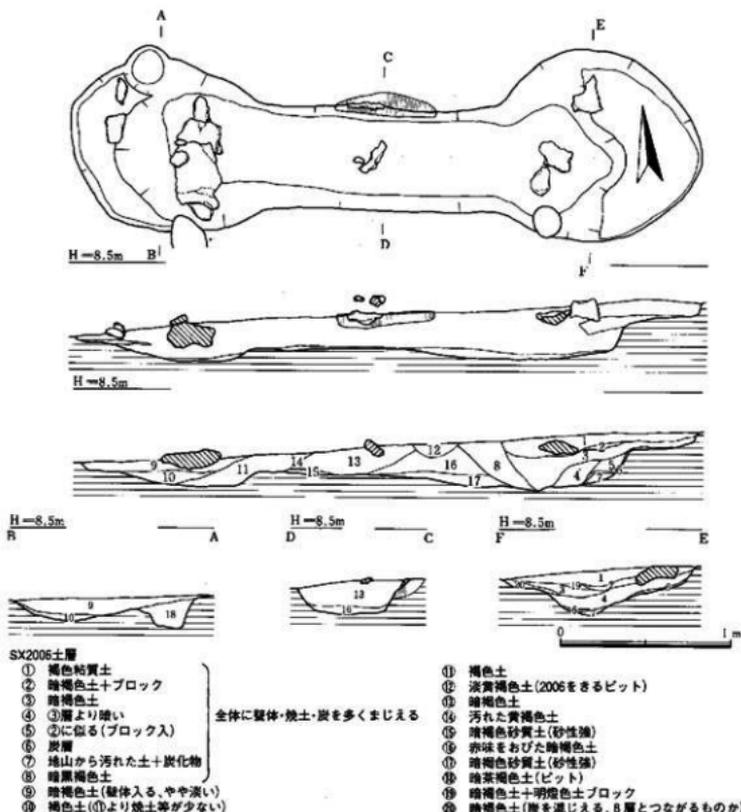
製錬炉2006周囲には壑穴住居・土坑・ピット等の多くの遺構が密集している。また焼土坑と一括している中には、炭窯・鍛冶炉などの機能を持つものも有ると考えられる。このような遺構の検出状況から、谷部縁辺を中心として製鉄関連の施設が有機的に展開していたと想定される（第10図）。

SX2006及び第3トレンチからは土器類がほとんど出土しておらず、時期決定が非常に困難であるが、鉄滓が堆積している層は第1包含層のI層最下部であり、I層出土土器から考えて、製錬炉の操業時期は8世紀前半代に位置付けられるものと考えている（「包含層の調査」の項参照）。

出土遺物（第11図）

製錬炉2006及び第3トレンチ出土の炉壁（210、211）、炉底滓（212、213）を図示した。

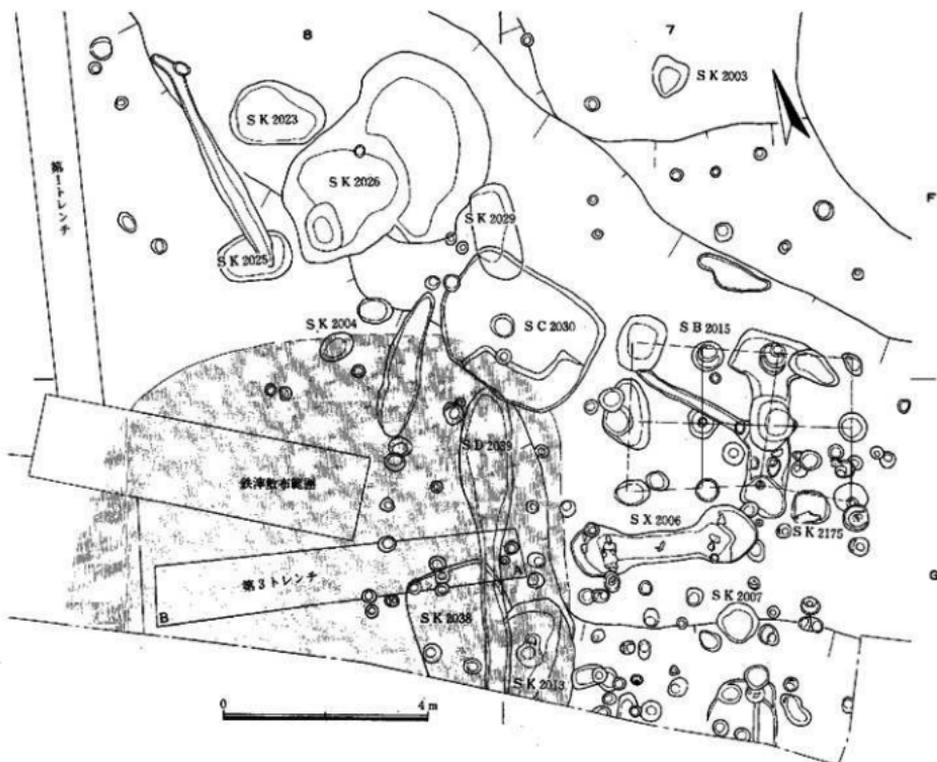
210は第3トレンチ出土、長方形の炉体端部コーナーを形成していた炉壁である。重量1.75kgである。現状で炉壁粘土部分は厚さ3～5cmを測り、橙色を呈している。炉内側は滓が食い込んでおり、表面ガラス化している部分が多く観察される。炉内下部には滓が付着し炉体作成時の形態は不明瞭となる。炉内面には気泡が多く認められる。また外面に送風孔のための炉壁外面の窪みが認められる。炉内にも痕跡が残っており、内面周囲は送風による高温のためか炉壁内面が歪んでいる。横断面aラインが炉底面にあたるものと考えられ、このライン上部に滓が溜っている状態である。送風孔下端と炉底間は7cm程度である。また断面a-bはガラス化しておりササ痕跡が多量・明瞭に認められ、aからは一部滓が垂れ込んだ様な状態が観察できる。他の炉壁部分とは状態を異にしており、この面以下は下部構造部分に当たり、a-bがその接合ラインではないだろうか。



第8図 SX2006実測図 (1/30)



第9図 II区第1包含層第3トレンチ土層図 (1/80)

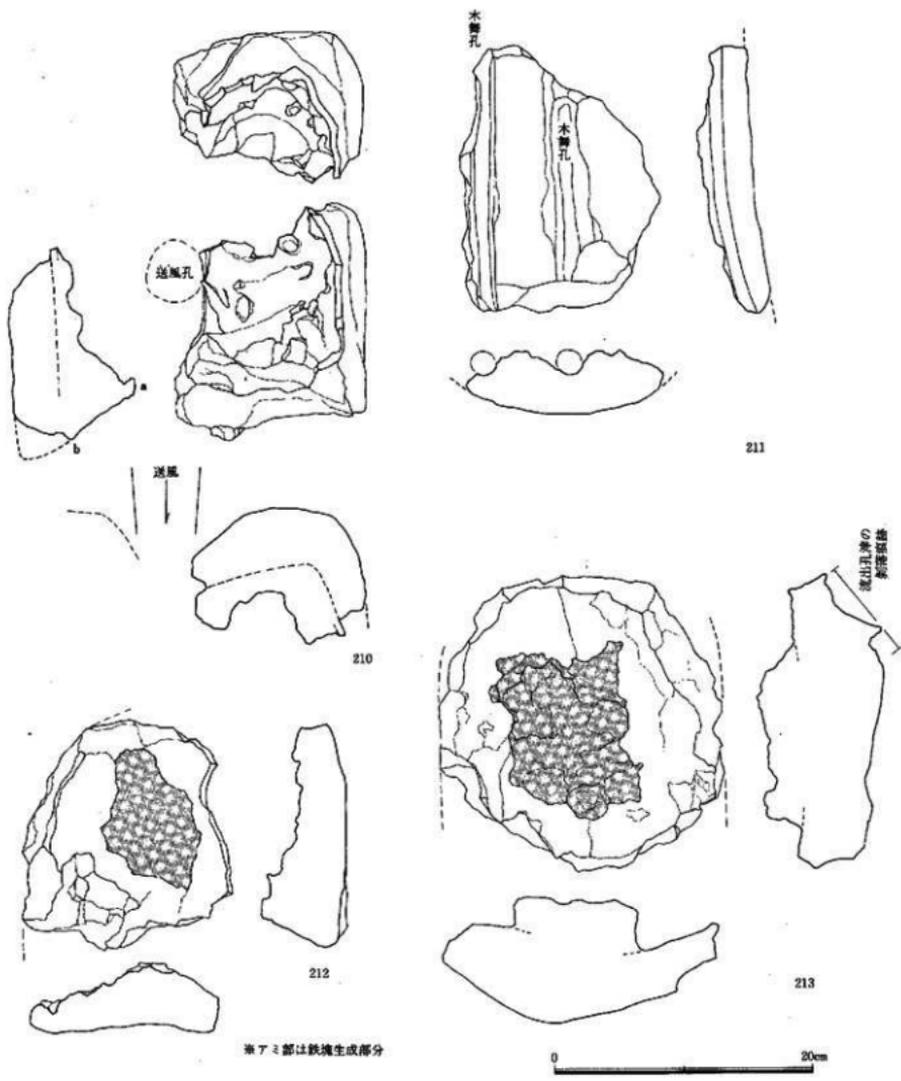


第10図 SX2006周辺遺構配置図 (1/100)

211は製錬炉2006内出土の弧状を呈する炉壁である。重量0.9kgである。炉内に当たる部分は欠失し、炉壁外面部分のみ残存している。縦方向に炉体構築時に骨材として用いた木舞の痕跡が残っている。この木舞孔は径2cmを測り、6cm程の間隔を取り、並列している。痕跡の内面は平滑で、木材を削り整形してから用いたのであろうか。縦断面からは木舞が弓状になっている状態が観察された。これから復元される炉体は略円形とすれば、断面部分で外径約40cmとなる。

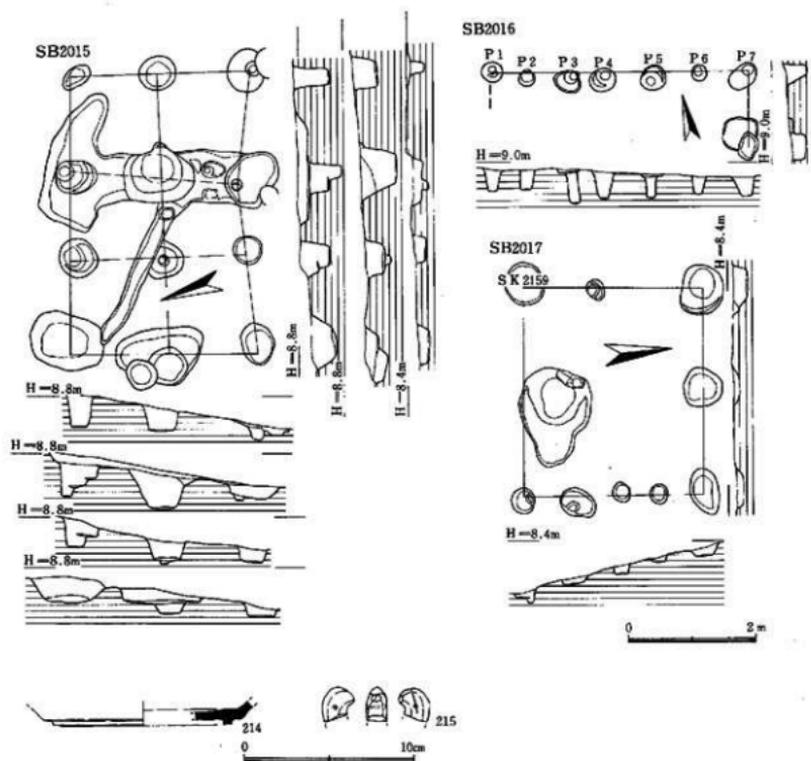
212は第3トレンチ出土の炉底滓である。重量1.65kgである。長軸端部にあたり、図面上側は長方形炉体の小口部に接しており、半円状に弧を描いている。図面左側は長側面の炉壁に接していた部分で、滓の端部が幅2cm程せり上がりを見せている。底面は緩やかに波うつが、全体的にはほぼ平坦である。また底面全体に径1mm以下の灰白色砂が付着しており、炉の下部構造がこの砂によって構築されたと考えられる。炉底面から厚さ2cm程は鮎状の緻密な滓が形成され、その上面にごつごつした凹凸のある滓が乗っている。全体に薄く平板な印象を与える滓である。炉内状況が不良であったのであろう。

213も第3トレンチ出土の炉底滓である。重量6.05kgである。図面左右両端共に一部炉壁に接して



※アミ部は鉄塊生成部分

第11図 SX2006関連遺物実測図 (1/4)



第12図 SB2015、SB2016、SB2017及び出土遺物実測図 (1/80、1/3)

いたと考えられ、図面幅幅が最終操作時の炉内幅に相当する。横断面は弧を描き縦断面はおおよそ平坦であり、いわゆる船底状を呈している。底面には212で見られたような砂粒の付着はほとんど認められない。底面より厚さ3～4cm程気泡の入らない緻密な滓が形成され、くぼんだ上面にごつごつした凹凸のあるやや粗い滓が乗っている。また裏面には角張り突出した破面が存在しており、流出孔に近いことが想定できる。

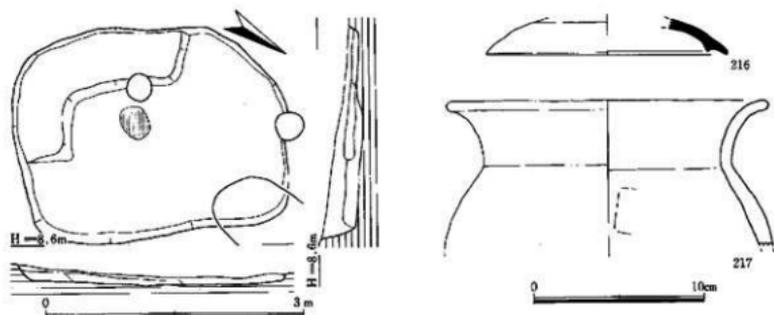
以上の炉壁・炉底滓の示す炉の形態は異なる点が多く、いずれも製錬炉2006に伴うものと考えられることから、複数の操作の際に形態の異なる炉を構築した可能性が考えられる。

2) 掘立柱建物

Ⅱ区南側斜面を中心にピットを検出したが、建物としてまとめることができたものは少ない。また斜面上部に柱筋の通るピットを確認しても対応するピットが斜面下側で検出できない例も多い。特に製錬炉2006の周囲には多くのピットが集中しており関連の施設と考えられるが、建物としてまとめられていない。

SB2015 (第12図)

G・7区で検出する。2間×3間の総柱の掘立柱建物である。柱穴は径60cm～80cmのものが多い。



第13図 SC2030及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)

また東から2列目の柱筋は布掘り状に一段下げた後、略円形状に柱穴を掘り下げている。図上では小ビットを介して製錬炉2006と切り合い関係にあるが、現地での切り合い関係は不明瞭であった。

出土遺物 (第12図 214、215)

214は須恵器坏である。高台は底平で、外底面は回転ヘラ削りを施す。

215は布掘りの掘り方上面から出土した、石製勾玉である。片側に頭部まで1条の細線が刻まれる。

SB2016 (第12図)

F・6区で検出する。柱穴は径20cm～40cm、深さ40cm程度である。斜面上端部でビットが並んでおり、建物を構成するものと考えられるが、下位には対応するビットは検出していない。P1～P3～P5～P7間は柱間約1.2m、P2～P4～P6は1.2m・1.4mでこの柱列は2棟の掘立柱建物と並存している可能性が高い。土師器小片が出土している。

SB2017 (第12図)

G・4区で検出する。北側桁行2間(3.3m)、梁行2.8mを測る。掘り方は10cm程度と浅い。南西隅の遺構は焼土坑SK2159であり、柱穴とは考えられない。切り合で柱穴が失われたものか、もしくはSB2016の様に斜面下位のビットは失われていて、建物としては更に南側に伸びる可能性もある。

3) 竪穴住居跡

SC2030 (第13図)

F・7・8区で検出する。製錬炉2006の北側に位置する。3.1m×2.5mの長方形を呈す。南側コーナーにL字形に貼付けによるベッド状の高まりを有する。床面に硬化する部分はなく、中央やや南よりに径40cm程の範囲で、焼土・炭化物がまばらに広がる。埴土は暗褐色土でベッド状の高まりは、淡黄褐色土により構築される。土師器・須恵器小破片、土錘等が出土する。

出土遺物 (第13図)

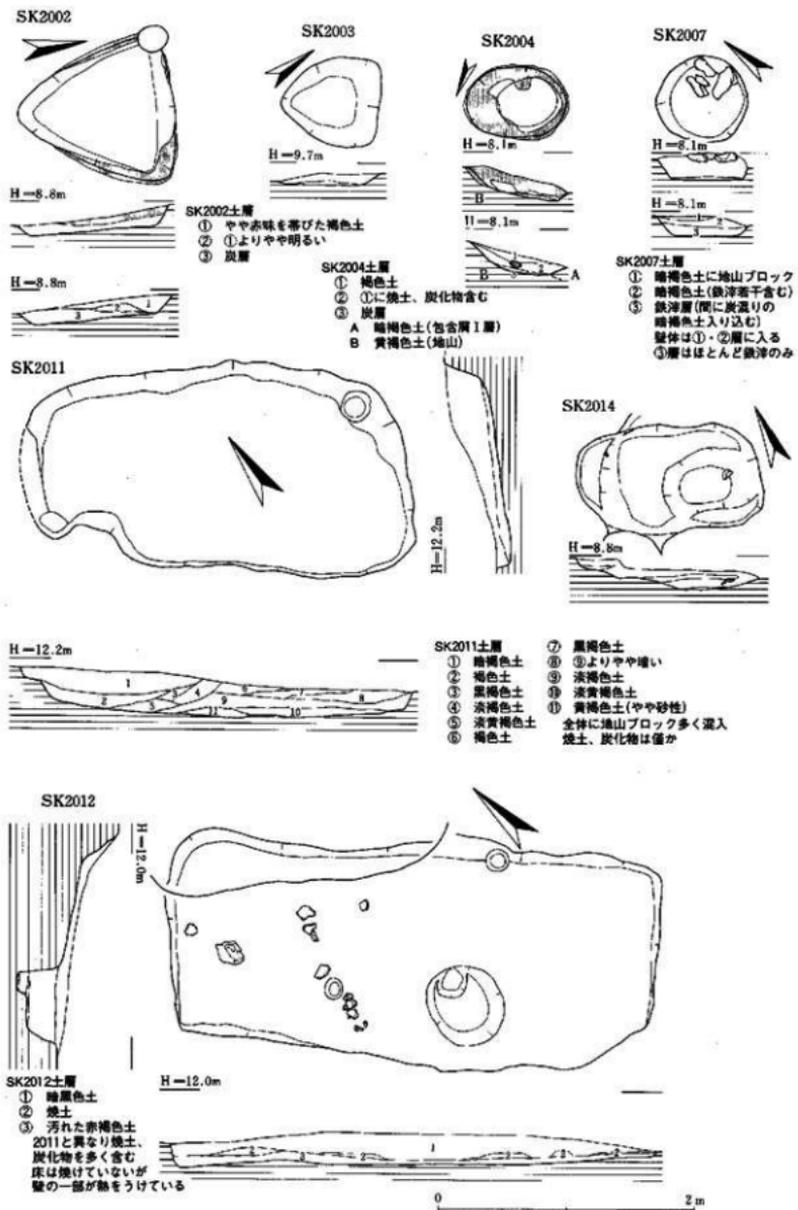
216は須恵器坏蓋である。内面に短く退化したかえりを有する。天井部外面は回転ヘラ削りによる。

217は土師器甕である。口縁部は外湾し、端部は丸く納める。体部内面にはヘラ削りを施す。

4) 土坑

SK2002 (第14図)

G・7区で検出する。一辺1.2mの略正三角形を呈する焼土坑である。内壁の1/2程が熱をうけて赤



第14図 SK2002、SK2003、SK2004、SK2007、SK2011、SK2014実測図 (1/40)

変しており、地山もこれに合わせて赤変する。南端部コーナー・北壁の中央部及び底面には熱は及んでいない。また底面は地山傾斜に合わせて南側に緩く傾斜している。北壁の中央部に煙道の様な機能を有する小型の炭窯であろうか。出土遺物には土師器・須恵器の小片がある。

SK2003 (第14図)

F・7区で検出する。一辺70cmの略三角形を呈す。削平により残りは非常に悪かったが、埋土は焼土・炭化物で満たされていた。壁面・床面に熱を受けた痕跡は見られない。何らかの施設の下部構造であろうか。鍛冶炉の可能性も考えるが、埋土の水洗等を行っていないため遺構の性格には不明な点が多い。土器は出土していない。

SK2004 (第14図)

G・8区で検出する。長径80cm、短径55cmの長円形を呈する。谷部に向かって長軸が伸び、底面も合わせて緩く傾斜する。炉壁はないが内壁は強く焼けている。底面には全体に炭層が広がり、その下は熱を受けていない。埋土からは数個の鉄滓も出土。SK2004は谷部に掛かる包含層を一部除去した所で検出しており、層的にはSX2006起源の鉄滓堆積層と同一のものと考えられる。

SK2003、2004は埋土の状況、形態が他の焼土坑とは異なっており、製錬炉2006に関連する鍛冶炉等の製鉄関連遺構と考えられる。

SK2007 (第14図)

G・7区で検出し、SX2006の南側に位置する。径70cmのほぼ円筒形の土抗である。最下層に厚み8cmで、1～5cm角の鉄滓26kgが充填され、この中には鉄塊系遺物も含まれている。壁・底面に被熱は認められない。また上層からは掘り方に沿って炉壁が出土しているが、出土状況からこの土抗に伴うものとは考えにくい。しかし底面に充填された鉄滓は製鉄関係の炉底部構造として見受けられるものであり、現状ではSK2007の機能は不明である。

SK2011 (第14図)

F・14区で検出する。長軸3m、短軸1.6mを測る。埋土には焼土・炭化物などはあまり見られず、全体に地山のブロックが多く混入している。土師器破片が出土する。

SK2012 (第14図)

F・14区で検出する。長軸3.8m、短軸1.8mを測る。一部SK2011に切られる。埋土は底面に汚れた地山の土が堆積し、その上面に焼土・炭化物が全体に広がっている。壁・底面に被熱は見られないが、焼けた炉壁が若干出土している。最下層の赤褐色土はレンズ状ではなくほぼ水平に近く堆積しており、一度掘削した後に貼付けたものかもしくは天井等の施設が崩落したものではないかと考えられる。周辺からは炭化物が割合多く散乱しており、具体的な形態は不明であるが、SK2011・2012が炭窯として機能していた可能性は十分に考えられる。

出土遺物 (第17図 218～220)

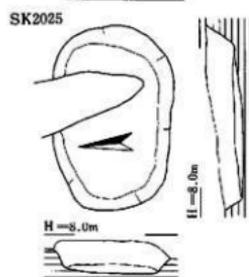
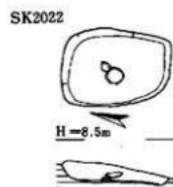
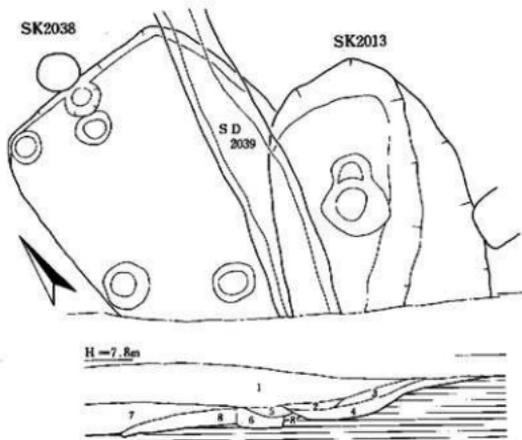
いずれも土師器である。218、219は甕である。ともに口縁部は緩やかに外反し、端部は面取りを行う。220は高坏脚部である。筒部は太く直立し、脚部に緩やかに開いている。

SK2013 (第15図)

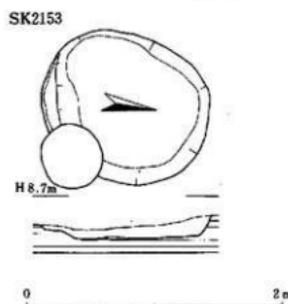
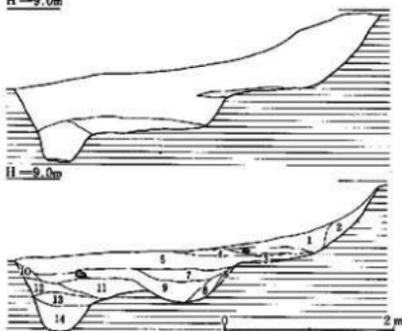
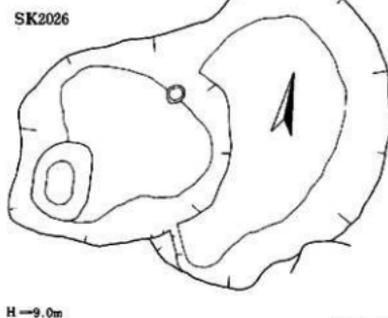
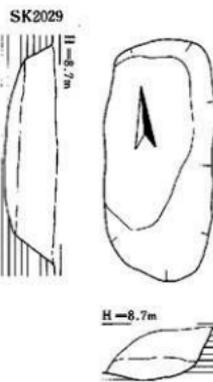
G・7区で検出する。SK2038→SK2013→SD2039の関係にある。包含層を除去して検出する。埋土は暗褐色土で土器はまったく出土していない。上層に鉄滓・炉壁が併せて13kg含まれている。製錬炉2006に伴う排滓場と思われる。

SK2014 (第14図)

F・6区で検出する。深さ5cm程の不整形な土坑SK2001内で検出する。切り合い関係は不明である。



- SK2013, SK2038, SD2039土層
- | | | |
|------------------|--------|---------------------|
| ① 暗赤褐色土(鉄滓・壁を含む) | 包含層 | ⑤ やや黄味をおびた褐色土 |
| ② 褐色粘質土(鉄滓混じる) | SD2039 | ⑥ 暗褐色土(ピット) |
| ③ 暗褐色土+鉄滓・伊壁多 | SK2013 | ⑦ 褐色土 |
| ④ 暗褐色土 | | ⑧ 暗青灰色土(粘性強) SK2038 |

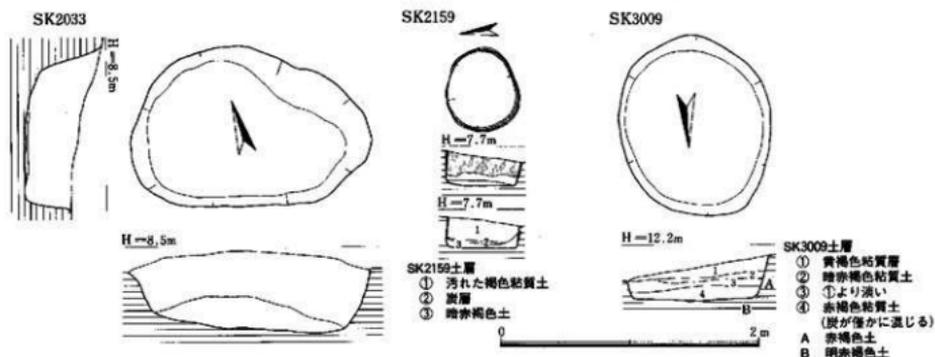


SK2026土層

- | | |
|-------------------|--------------------|
| ① 暗(黒)褐色粘質土 | ⑥ 暗赤褐色土 |
| ② 暗黄褐色土(堆山がやや汚れる) | ⑦ 暗褐色土+赤褐色土混合 |
| ③ 暗褐色粘質土 | ⑧ 暗赤褐色粘質土 |
| ④ 暗赤褐色土 | ⑨ 暗褐色土に赤褐色土ブロック含 |
| ⑤ ①に同じ | ⑩ やや暗い黄褐色砂質土(堆山土) |
| | ⑪ 暗赤褐色土+暗褐色土ブロック若干 |

- | |
|------------|
| ⑫ ①よりブロック多 |
| ⑬ ⑫よりやや明るい |
| ⑭ 汚れた赤褐色土 |
- 上層は暗黄~赤褐色、下層は暗褐色主体

第15図 SK2013, SK2022, SK2025, SK2026, SK2029, SK2038, SK2153実測図 (1/60, 1/40)



第16図 SK2033、SK2159、SK3009実測図 (1/40)

SK2001は南半に薄く焼土・炭化物が散布しており性格は不明である。SK2014は3段に掘り窪められ、2.2m×1.2mの隅丸長方形を呈する。埋土は褐色土。土師器甕小片、須恵器坏蓋、滑石製石錘が出土している。

出土遺物 (第17図 221、222)

221は土師器碗である。体部は低平で口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は外方にふんばり端部は外側に僅かに肥厚する。222は滑石製の石錘である。十字形の溝を有し、重さ61gを測る。

SK2022 (第15図)

G・8区で検出する。80cm×60cmを測る長方形の土坑である。覆土は暗褐色土で、須恵器坏身が2個体出土する。坏身はいずれも口縁部に二次的な焼成を受けており、淡赤褐色化している。また埋土中より還元硬化した炉壁が若干出土している。埋土に焼土・炭化物等含まれておらず、土器の受けた二次的な焼成と関連があるのであろうか。6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物 (第17図 223、224)

いずれも須恵器坏身である。器高は浅く、口縁部は短く外方に立ち上がる。223は底面にはヘラ切り施し、ヘラ記号が残っている。また口縁部の内外面全周に二次的な焼成を受け、蓋受けの部分は赤味を帯び、立ち上がりと上部1cm程はススが付着している。224は外底面に手持ちのヘラ削りを施す。

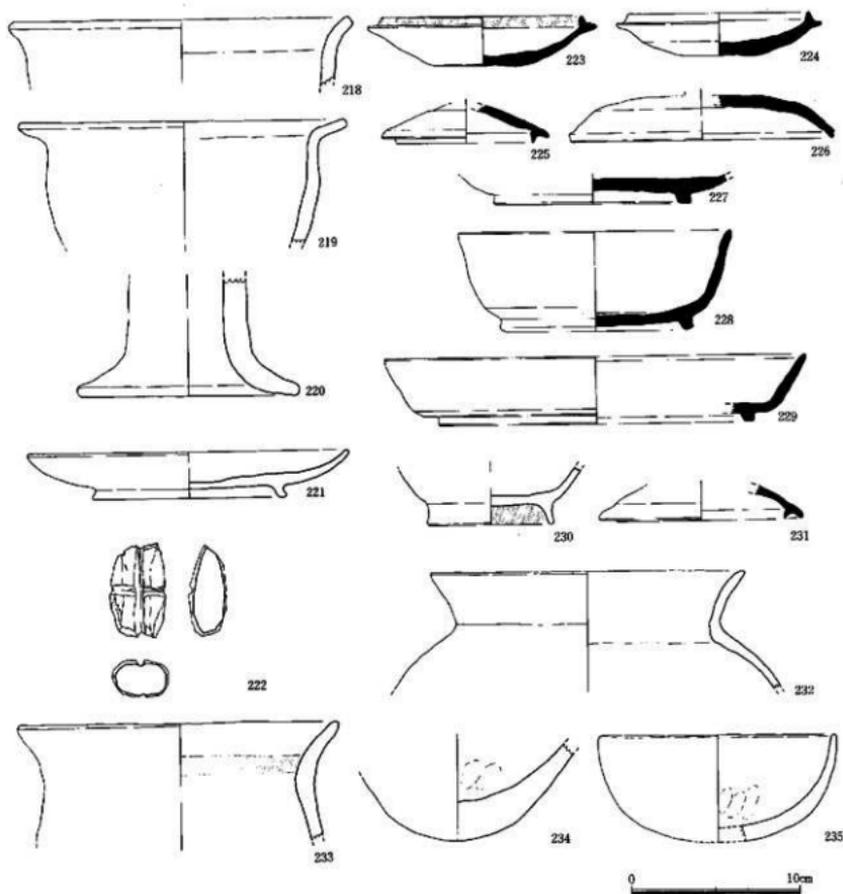
SK2025 (第15図)

F・8区で包含層 (I層) 除去後に検出する。1.4m×0.9mの長方形を呈する。埋土は上層が暗褐色土、下層が暗赤褐色土である。土師器細片が出土。

SK2026 (第15図)

F・8区で西半を包含層 (I層) 除去後に検出する。斜面を一部切り込んで造成している。2基の切り合いの可能性もあるが、一連の土坑として報告する。埋土には西側のくぼみに地山のブロックを多く含み、上層全体に暗褐色土が堆積している。土師器・須恵器破片と共に、上層を中心として、炉底滓・炉壁等が併せて7kg出土し、このうち3kgが鉄塊系遺物である。周辺遺構・包含層からは鉄塊系遺物の出土は極めて少なく、SK2026からのこれだけの量の鉄塊系遺物出土は注目される。

またSX2026出土鉄滓の分析結果から、出土鉄滓中に鍛冶滓が含まれていることが判明した。SK2026は鍛冶遺構とは考えにくく、鉄塊系遺物の出土を考えると周囲に鍛冶関連の遺構が存在する可能性が高く、谷部縁辺で検出した土坑の中に鍛冶炉が含まれていることも考えられる。なお周囲の遺構・包



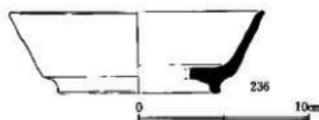
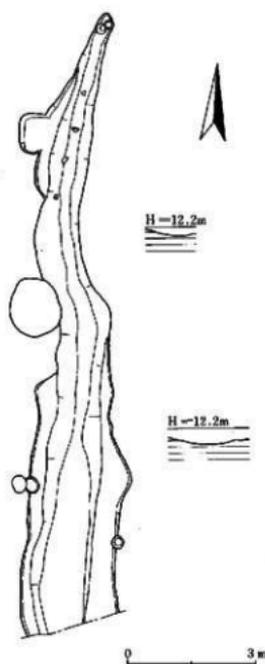
第17図 古墳時代以降土坑出土遺物実測図 (1/3)

含層から羽口等の遺物は出土していない。8世紀前半～中頃に位置付けられる。

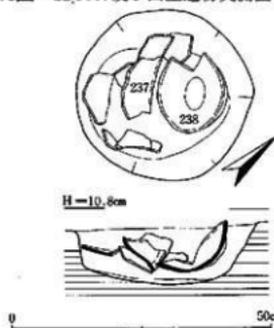
出土遺物 (第17図 225～229)

225、226は須恵器蓋である。225はかえりを有し、天井部4/5には回転ヘラ削りを行う。226は口縁部は短部を折曲げ嘴状に成形している。またつまみの部分が欠失している。227～229は高台を有する須恵器坏である。228は底部から体部の境は丸みを帯び、高台は斜め外方に貼付けられる。227、229は高台はほぼ直立する。227、228の外底面には回転ヘラ削りが施される。

SK2029 (第15図)



第18図 SD3007及び出土遺物実測図 (1/120、1/3)



第19図 SP2197及び出土遺物実測図 (1/10、1/3)

F・8区で包含層(I層)除去後に検出し、SC2030を切る。1.9m×0.8mの小口部が弧状をなす長方形を呈す。埋土は暗褐色土で土師器・須恵器小片が出土する。

出土遺物 (第17図 230)

土師器碗である。高台は高く僅かに外方に張り出している。外底は黒褐色を呈す。

SK2033 (第16図)

F・8区で検出する。SK2026の北側に隣接する長円形の土坑である。埋土はSK2026と同様、上層暗褐色土、下層には地山のブロックを多く含んでいる。埋土上層を中心として大型の炉底塊(12.7kg)を含む製錬滓29.2kgが出土する。出土鉄滓は炉底塊・鉄塊系遺物等が主体となっている。7世紀末～8世紀前半に属するものであろうか。

出土遺物 (第17図 231)

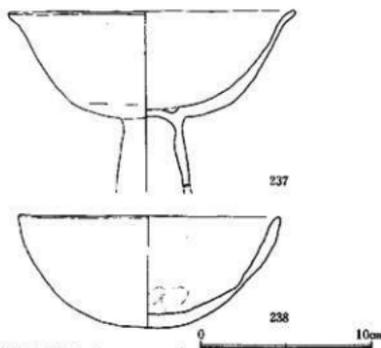
須恵器坏蓋である。口縁部に退化したかえりを有する。口径に比べ器高が高くなっている。天井部外面の調整は不明である。

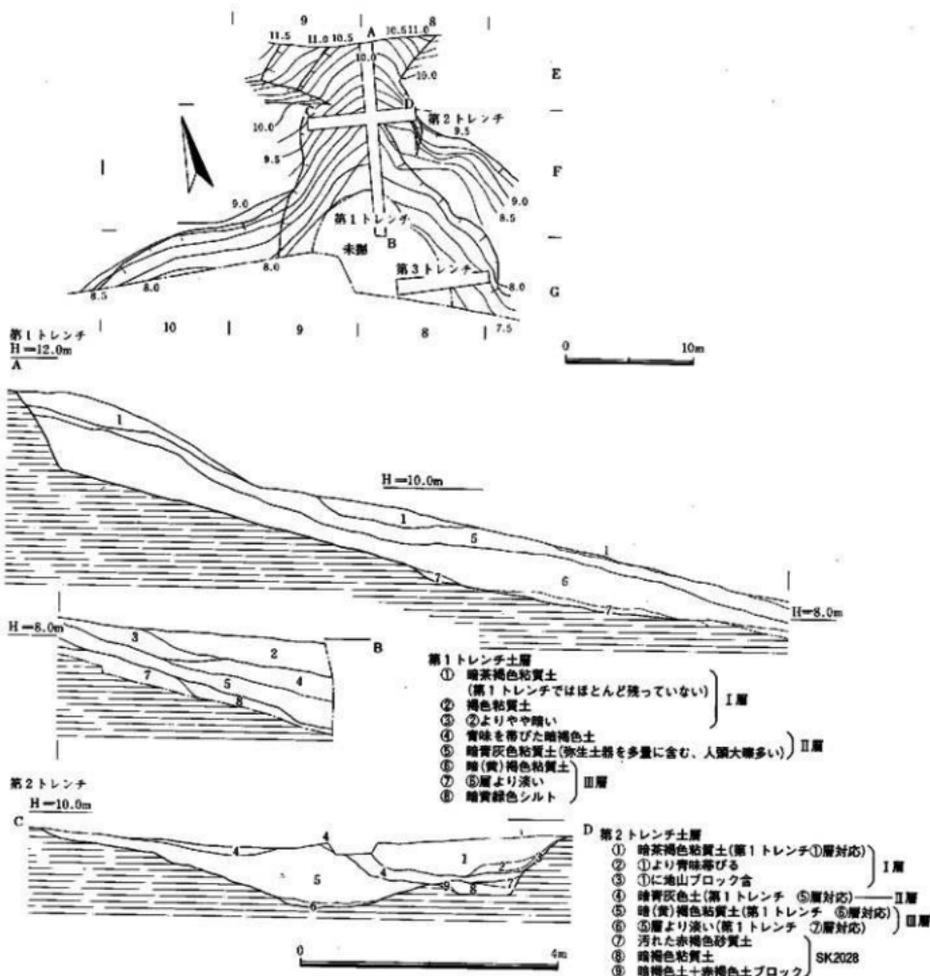
SK2038 (第15図)

G・8区で検出する。包含層を除去した後に検出している。埋土は青灰色粘質土で古代の遺構とは埋土が異なっている。弥生土器を多く含むが、土師器甕・椀が出土しており、古墳時代後期に属する。

出土遺物 (第17図 232～235)

232、233は土師器甕である。232は胴部が張り、頸部は内外面とも明瞭に屈曲する。口縁端部は外反気味に丸く納める。233は胴部が張らず、緩やかに





第20図 II区第1包含層除去後地形図及び包含層土層図 (1/400, 1/80)

外反して口縁部に至る。頸部内面に幅1cm程、帯状にスガが付着する。234は厚手の甕底部破片である。235は土師器碗である。身は深く、口縁端部は丸く納める。

SK2153 (第15図)

G・5区で検出する。径1.2m程度の略円形の土坑である。底面は平坦である。焼けた痕跡はない。

土師器甕、須恵器小片が出土。

SK2159 (第16図)

G・4区で検出する。0.7m×0.5mの長円形の土坑である。粘土壁はないが、壁は全周にわたり幅2cmほど被熱赤変する。また埋上中層には炭層が存在する。須恵器蓋坏が出土。

SK3009 (第16図)

C・2区で検出する。1.4m×1.2mの長円形の土坑である。SD3007を切る。遺物は細片のみである。

5) 溝

調査区内で検出した溝は大半が近現代の開削と見られ、埋土は灰色砂で染付け等が出土している。

SD3007 (第18図)

B、C・1、2区で検出する。長さは14mを測り、断面形は深さ5～20cmの緩やかな浅皿状を呈する。丘陵の裾部を横断する様に開削され、レベルの高い部分は削平を受け欠失している。埋土は暗褐色土で、土師器・須恵器の小片が出土している。8世紀の前半～中頃に属する。

出土遺物 (第18図 236)

須恵器坏である。高台は高めで直立している。底部と体部の境は明瞭で、体部はまっすぐ外方に伸びる。口縁部外面がナデにより僅かに窪んでいる。

6) ビット

SP2197 (第19図)

F・14区で検出する。径35cm、深さ10cmのビット内より、土師器碗・高坏が出土する。埋土は暗褐色土である。

出土遺物 (第19図 237、238)

いずれも土師器である。237は高坏で坏部は深く、緩やかに屈曲する。238は碗である。ほぼ完形で、内面全体にスガが付着する。

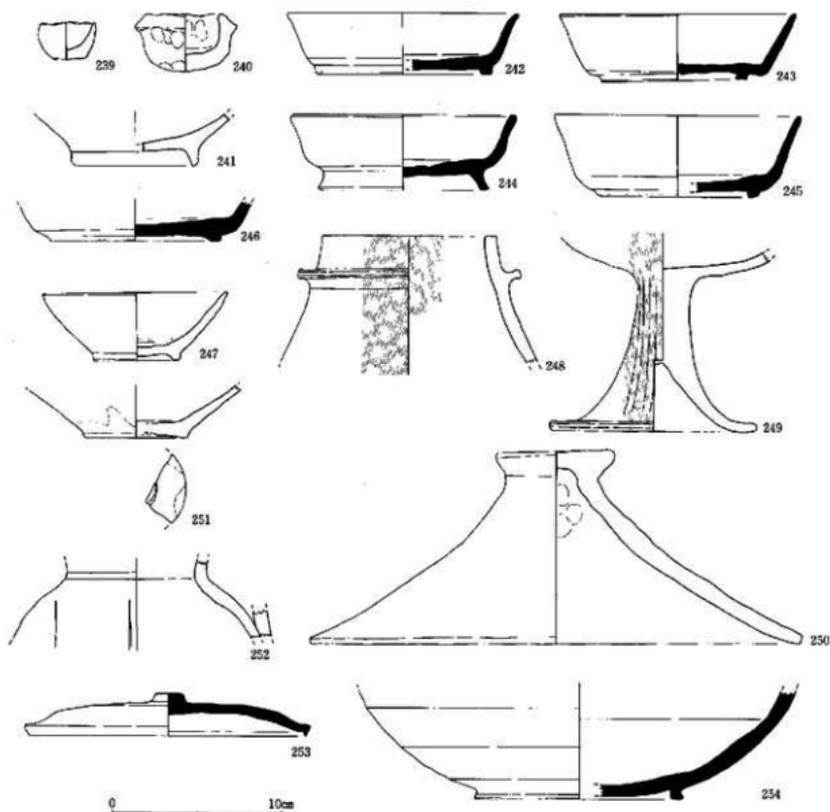
4. 包含層の調査

「大原A遺跡 1」の「包含層の調査」の項でも述べたように、Ⅱ区には3箇所にも谷に堆積した包含層が形成されている。第2・第3包含層については既に前述報告で述べており、本報告では圃場整備部分に大きくかかっている第1包含層について説明する(第20図)。

第1包含層はE、F、G・8、9区で検出されている。丘陵南側斜面に形成された包含層で、弥生時代中期～中世の遺物が出土している。出土遺物は土器類60箱、鉄滓・炉壁60箱である。

層序は大きくⅠ～Ⅲ層に分類できる。Ⅰ層は褐色土を主体とし、土師器甕・坏・皿・ミニチュア土器、須恵器甕・蓋坏、陶磁器碗・皿・水注等が出土している。陶磁器は上面を中心として越州窯系青磁・龍泉窯系青磁・白磁が出土しているが、主体となるのは土師器・須恵器である。谷部に掛かる土坑等はほとんどがその縁辺に位置しており、Ⅰ層を除去したところかもしくは除去途中(Ⅰ層下位)で検出している。検出遺構のピークの一つがこの時期に当たっており、これにより包含層を形成したものであろう。またSX2006から廃棄されたと考えられる鉄滓・炉壁はⅠ層最下部に堆積しており、流入時期としてはⅠ層形成の初期に当たると思われる。Ⅰ層は図示し得る遺物は少量であるが、およそ8世紀前半～中世に属するものと考えられる。この中でも8世紀代のものが主体を占め、周辺遺構からの出土状況とも合致する。鉄滓層中より土器の出土が見られなかったため細かな時期決定は行うことができないが、Ⅰ層が形成され始める8世紀の前半代と考えておきたい。

Ⅱ層には弥生中期～後期に属する土器が多量に包含されている。器種も甕・壺・高坏・器台等豊富



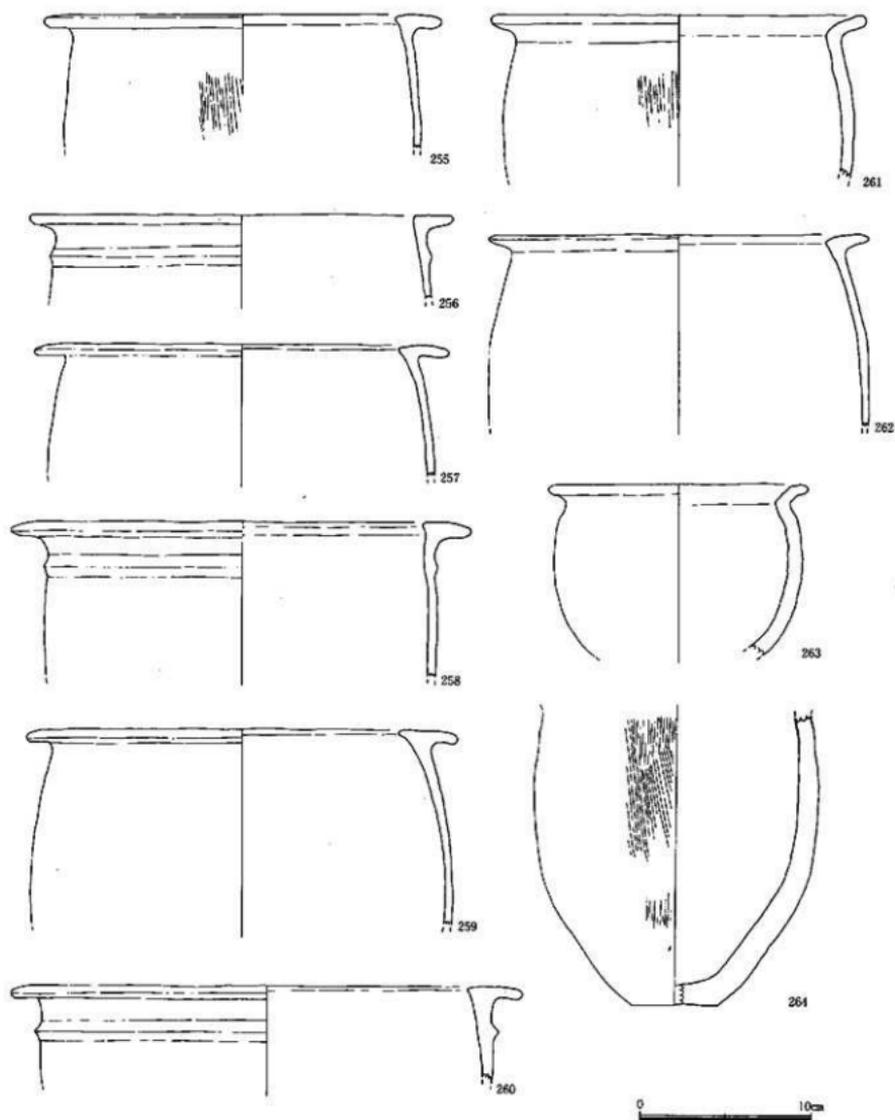
第21図 II区第1包含層出土遺物実測図(1) (1/3)

で丹塗りの祭祀土器も多く出土している。丘陵斜面上には弥生時代に属する遺構・遺物はそれほど検出されておらず、多量の土器は丘陵尾根上から投棄されたものと考えられる。現状では、削平により試掘調査においても弥生時代の遺構は尾根上でもほとんど確認されなかったが、遺物量から大きな集落が形成されていたものと考えられる。

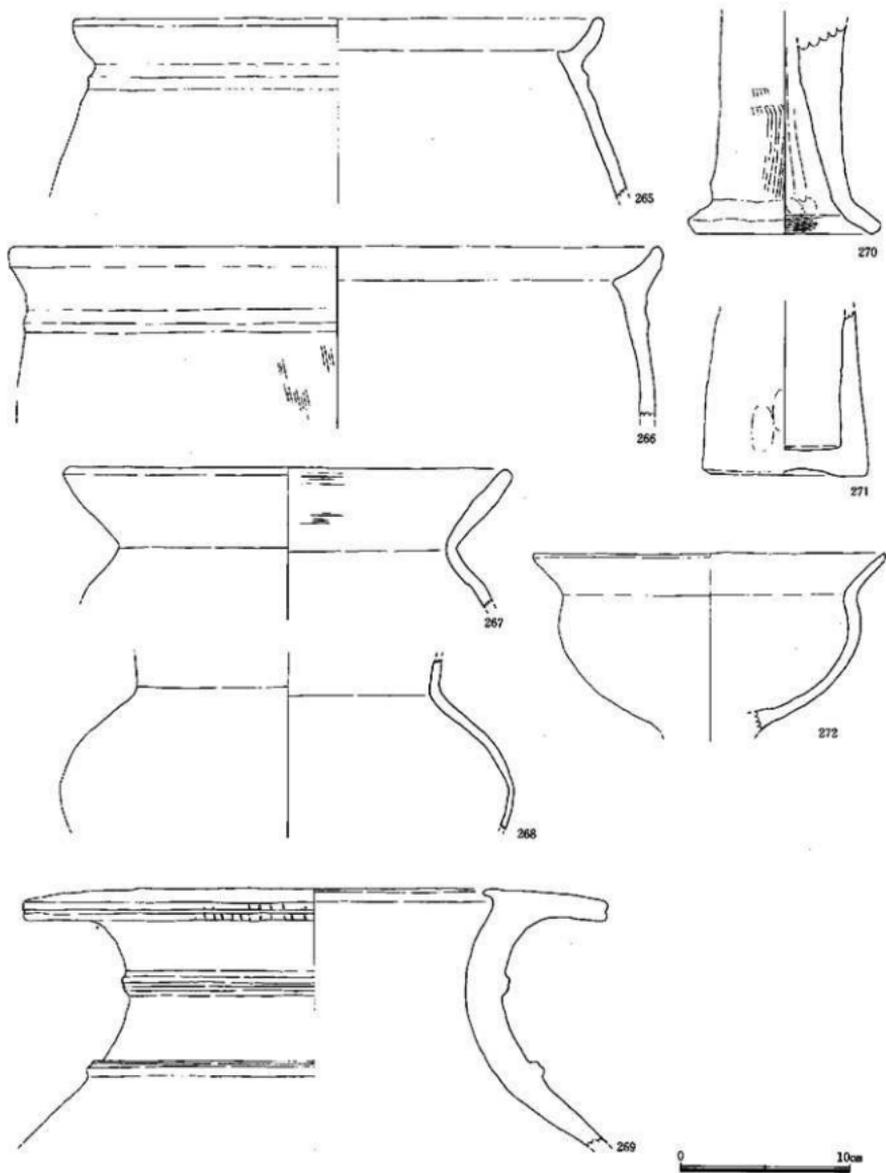
III層からは弥生時代中期に属する甕・壺が出土しているが、出土量は僅かである。小破片での出土が大半であり、集落形成以前に埋没したものであろう。

出土遺物(第21、22、23、24図)

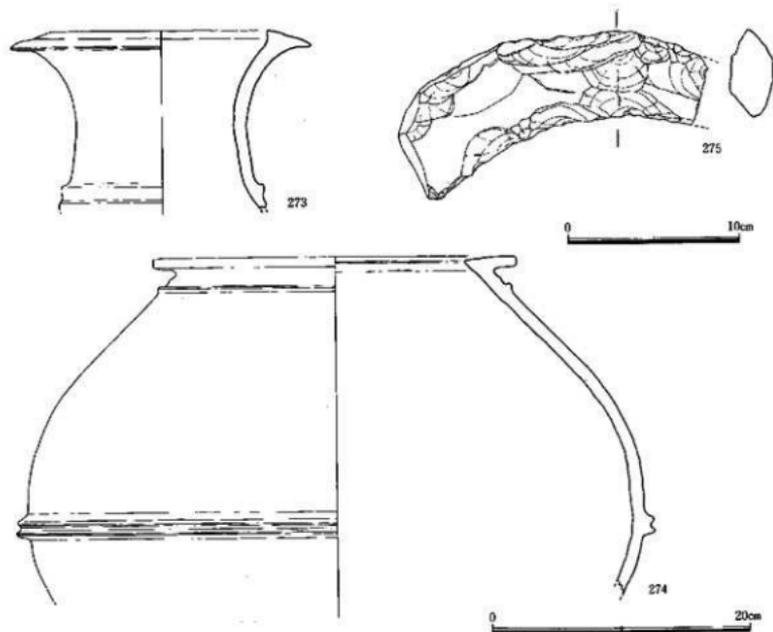
239～250は包含層上面出土遺物である。この面までは重機で剥ぎ取りを行っており、この上部に中世に属する包含層があったと考えられる。248～250は混入の弥生土器である。239、240はミニチュア土器である。240は羽釜で茶褐色を呈する。241は土師器碗である。242～246は須恵器坏である。いず



第22图 II区第1包含层出土遗物实测图(2) (1/3)



第23图 II区第1包含层出土物实测图(3) (1/3)



第24図 II区第1包含層出土遺物実測図(4) (1/3、1/4)

れも高台を有し、高台が高く外方へふんばるもの(244)、低い高台が台部との境に付くもの(242、245)、やや内側に入るもの(243、236)に分けることができる。また外底面は245はヘラ切りで、それ以外のものは回転ヘラ削りを施している。247は越州窯系青磁碗である。輪状高台を有し、高台登付の部分のみ露胎となる。色調はやや暗いオリーブ色を呈す。内底面に重ね焼きの痕跡が輪状に残る。

251～254はI層出土である。251、252は越州窯系青磁である。251は蛇の目高台を有する。色調は淡いオリーブ色を呈し、体外向裾部のみ露胎となる。252は水注である。対外面に縦方向に刻線が入る。253は須恵器坏葺である。口縁端部は折り曲げ断面三角形を呈する。ボタン状のつまみが付き、天井部にはヘラ削りが施される。254は甕の底部であろうか。外面には回転ヘラ削りが行われる。

255～275はII、III層出土で、256のみIII層出土である。出土土器には甕・壺・鉢・器台等があり、特に甕が7割近くを占める。時期的には図示し得なかったものを含めて弥生時代中期前半～後期に属するものである。275は玄武岩製の石鏝未製品である。

5. 小結

本調査の報告については調査原因ごとに2冊の報告書をまとめているため、調査区全体の状況がわかりにくくなっているためここで簡単にまとめておきたい。

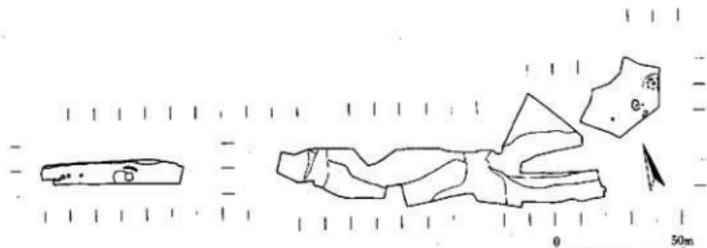
本調査によって検出された遺構・遺物の中で最も古い時期に属すると考えられるものはSK1038出土の石器である。縄文時代後期に属する可能性が高く、出土状況より一括性の高い遺物である。縄文

時代に位置づけられる遺構・遺物はこれ以外に認められず、遺構の広がり等は不明である。

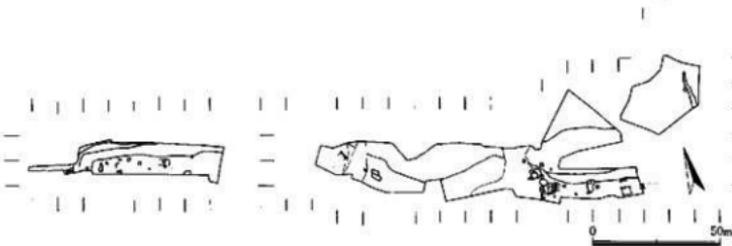
弥生時代に属する遺構はⅠ区南側緩斜面上およびⅢ区で検出している。Ⅲ区では削平が進んでおり遺構の残存状況は不良であったが、Ⅱ区に形成された包含層から多量の弥生土器が出土していることから、丘陵の尾根線上には弥生時代に属する遺構が多く存在していたものと考えられる。同様の状況は本遺跡の南側で調査の為された小笹遺跡に見ることができる。小笹遺跡では径11mの円形堅穴住居跡1基を検出しており、中から中期後半～後期後半に属する多量の遺物（ケース数百箱）が出土している。出土遺物は土器・鉄器・石器・ガラスなど多岐にわたり、石錘の出土量の多さから漁業を産業とした集落が想定され、また出土土器から調査区外にも該期の遺構が広がっていることが考えられる。また北側に位置する大原D遺跡で弥生時代に属する遺構の検出は少なく、柑子岳から海岸線に向けて張り出す低丘陵上に展開する弥生集落の立地・消長を考える上で貴重な資料となる。

古墳時代には生活空間としては一旦廃棄されており、丘陵の利用はほとんど行われていなかった様である。本調査では時期の判明した遺構はSK2022・SP2197等に限られる。また対象地の西側には群集墳が形成されており、古墳時代後期になって再び丘陵の利用が開始されたのであろう。

また8世紀代の製鉄関連を中心とした遺構を丘陵南斜面を中心に検出している。Ⅱ区製錬炉SX2006周辺には掘立柱建物・焼土坑・土坑が集中している。出土遺物が少なく詳細な時期決定はし得ないが、SX2006と有機的な関係を持って構築された可能性が十分考えられる。なおSX2006の燥業は包含層からの鉄滓の出土状況から8世紀前半代に位置付けられるものである。またSK2026からは鉄魂系遺物・炉壁等と共に鍛冶滓が出土しており、周辺に鍛冶遺構が存在していた可能性が強く、SK2003・SK2004などが候補として考えられるが削平により失われた可能性もあり、詳細は不明である。焼土坑として報告したものについても、その機能については炭窯等が考えられるが具体的には不明な点が多い。Ⅰ区には8世紀前半～中頃に燥業された製錬炉SX1027、SX1045が存在する。SX2006との先後関係は不



第25図 弥生時代主要遺構配置図 (1/2,000)



第26図 古墳時代以降主要遺構配置図 (1/2,000)

明である。また鉄製産に必要不可欠な木炭については窯として特定できる遺構はなく、Ⅱ区SK2011・SK2012等が候補となる。木炭の生産遺構については市内でも把握された事例はほとんどなく、今後の事例の増加が待たれる。この時期に出現する製鉄事業は官営的な色彩が強く打ち出されているものと考えられ、具体的には大宰府の管理下で行われた可能性が高い。大原海岸沿岸はチタン分の少ない良好な砂鉄の産地として知られており、この事実は古代においても経験的に把握されていたものであろう。現在整理中の大原D遺跡においても製錬炉が検出されているが、時期的には9世紀以降と考えられており、燃料となる木炭の生産状況（木材の伐採）等に合わせ、海岸沿いの丘陵上を移動しながら操業を行っていったのではないだろうか。なお鍛冶炉SX1021は時期不明であるが、製錬炉SX1027・1045等と時期的に併行する可能性が高い。今回の調査では製鉄関連遺構間の有機的関係や炭窯・粘土採掘坑等の製鉄に必要不可欠な遺構は不明瞭であった。

平安時代以降は遺物量は少なくなるが、陶磁器・銅銭の出土も見られ、継続的な土地利用が行われていた様である。また包含層からは越州窯系の青磁も出土しており注目される。

製錬炉の構造など炉形の復元については主に、検出した遺構を素材として様々な角度から行われているが、操業終了時に炉体を破壊し生成物を取り出すため、遺構の残存状況は非常に悪い。本調査においても3基の製錬炉が確認されている。いずれも箱型炉と考えられるが、それぞれについて簡単に炉形を復元してみた。

SX1027は下部構造部分および炉壁が残存し、炉内には炉底滓が残留していた。炉体掘り方は平面船形で、長方形の片側小口部分が略円形にすぼまっている。炉壁・被熱赤変もこれに沿って検出されており、掘り方の形状がそのまま上部構造の平面形を表していると考えられる。送風孔は確認できず、炉体の高さ等も不明である。下部構造は砂質土を充填して構築され、炉底には粘土の貼り付けは認められない。最終操業時の炉内規模は1.2m×0.38mで、これは炉壁が相当没食を受けた結果であり、操業開始時には炉壁厚はさらに厚みを増していたものと考えられる。また両小口部分の炉壁が不明瞭なことから、排滓が双方で行われたため破壊が進んでいることが想定される。

SX1045は炉底下に0.7m×0.35mの範囲での地山赤変部分のみ検出しており、不明瞭な点が多いが、残された炉壁から炉底には粘土が貼られていたことが予想される。また排滓坑出土鉄滓に粗砂等の付着が見られず、SX1027と異なり粘土による炉底構築が考えられる。被熱範囲の形状より、炉体平面形は長方形と考えられる。

SX2006は炉体掘り方は長方形であるが地山被熱部分は半円状を呈している。炉壁を見ると210に見られるように、明確なコーナーを有し平面長方形もしくは船形を呈する炉体の一部分と考えられるものがある。また211のように円筒形の炉体を想定させるものも炉内排滓坑から出土している。炉底滓をみると213の様な長方形箱型炉に特徴的な滓が多くみられる。このように見ると同一の下部構造上での複数回の操業の中で多様な炉形が採用された可能性が考えられる。複数の炉形の採用がどのような意味を持つものか、また技術的な系譜等の問題は今後の検討課題としたい。なお下部構造についても212・213では炉底の付着物が異なり、炉体構築法も検討が必要である。

以上簡単に炉形について述べたが、本調査で生じた問題点は単に製鉄産だけでなく当時の律令社会全体に関わるものである。また周辺での製鉄関連遺構については全くふれることができなかったが大原D遺跡や志摩町八熊遺跡では良好な資料が検出されている。時期的にも近接しており今後比較検討してゆきたい。

図 版



1 調査区遠景（東から）



2 II区東半全景



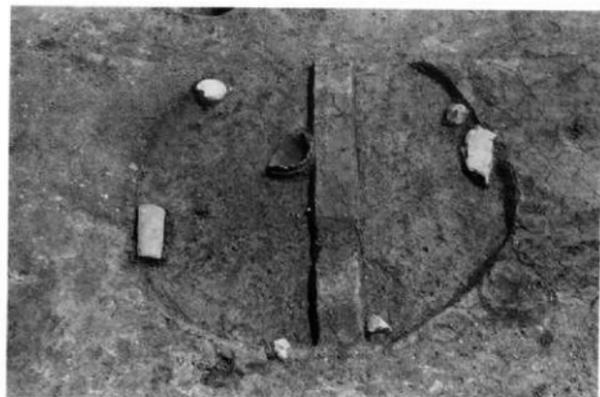
3 III区全景



4 SC3003 (東から)



5 SC3004 (西から)



6 SK3005 (北から)



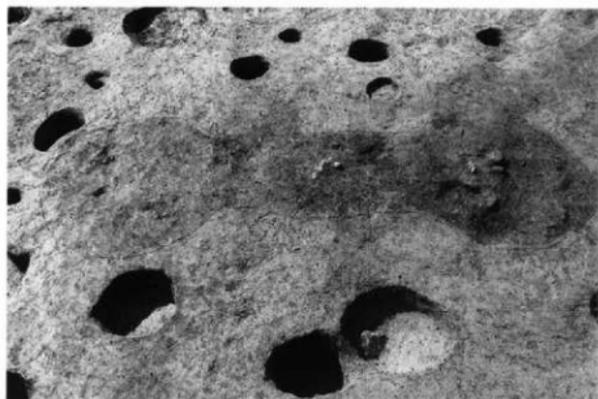
7 SK3011 (南から)



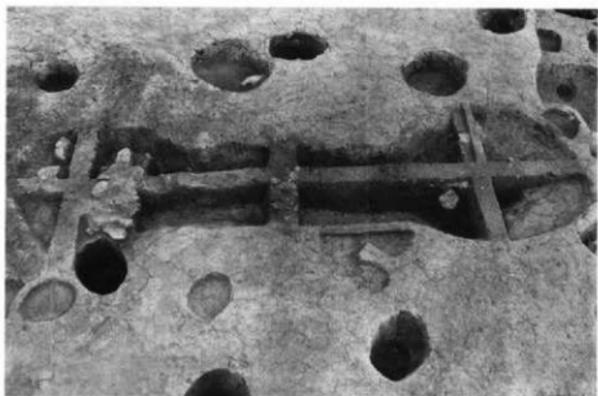
8 K3010 (北から)



9 K3008 (南から)



10 SX2006検出状況（北から）



11 SX2006掘削状況（南から）



12 SX2006完掘状況（南から）



13 SX2006周辺 (西から)



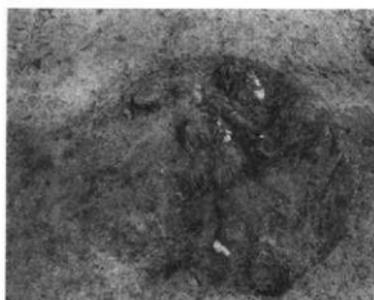
14 II区第1包含層第3トレンチ



15 SC2030 (西から)



16 SK2002 (南から)



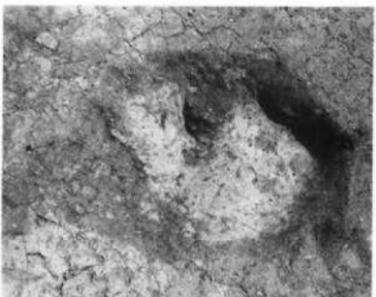
19 SK2007 (西から)



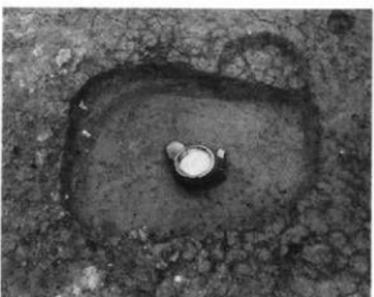
17 SK2003 (東から)



20 SK2007土層



18 SK2004 (北から)



21 SK2022 (西から)

22 SX2006北側遺構群 (南から)



23 SK2026土層



24 SK2011、2012 (東から)





25 II区第1包含層第1トレンチ土層



26 II区第1包含層第2トレンチ土層



207

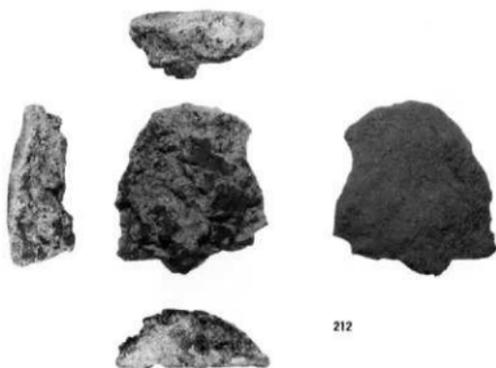
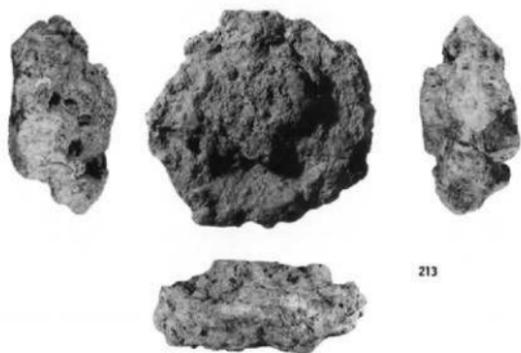
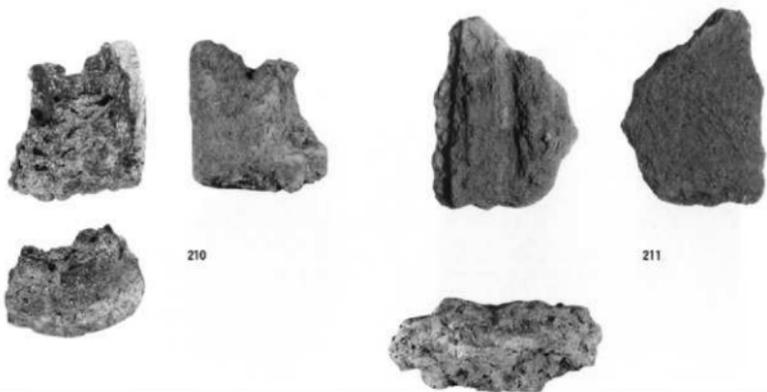


208



209

27 出土遺物(1)



福岡市埋藏文化財調査報告書第431集
大原 A 遺跡 2

1995年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 慶和印刷株式会社
福岡市博多区東郵町1丁目15番1号
